

本屋のない地域に 知の場を届けるために

追沼 翼＋鎌垣英人＋前田 昇

「まちの本屋がなくなる」という事態をどう見るか。
書店、取次、NPO、建築・まちづくり関係者、
行政の役割とは何か

2025年9月24日(水) 16時よりZOOMにて開催 司会・構成＝本誌・西川直子

■ 本とのかかわり

追沼 翼……私は普段、内装やリノベーションを中心に設計活動をしています。そのほかには、道路占有などの公共空間活用で行政業務にかかわっています。東北芸術工科大学の学生時代、山形市内に郁文堂書店というのがありまして、ずっとシャッターを閉じていたのです。住居併用なので、不動産としても流通するのも難しく、社会的包摂も視野に入れ、クラウドファンディングを立ち上げ、その書店を再オープンさせることができました。それがきっかけで、NPO法人ブックストア・ソリューション・ジャパンさんから声をかけていただき、今、鳥取で「まちの本屋」を復活させるというプロジェクトに取り組んでいます。

鎌垣英人……今は楽天ブックスネットワークと名前が変わっていますが、出版取次の大阪屋で、かれこれ40年、雑誌流通、書籍流通や書店営業に携わってきました。そこを退職後、2023年の4月ごろだったと思いますが、朝日新聞に自治体の1/4以上に本屋がないという記事がかなり大きく報じられまして、話題になりました。その記事より前から、まちに本屋が必要だという声にこたえようとブックストア・ソリューション・ジャパン[BSJ]というNPOを立ち上げました。現在その副代表として、鳥取県の江府町という人口2,300人のまちで「まちの本屋」をつくれな

いかと模索中です。同時に「版元ドットコム」という出版社団体にもかかわっていて、特に小さな出版社や、新刊書店の動向を見ながら、まちに本屋があるとは

どういうことなのか、考えています。
前田 昇……私はもともと鳥取県西部に位置する日吉津村の職員で、教育委員会で社会教育を推進したり、平成の町村合併の時、住民投票を担当したりしてきました。一方で、若い時から地域の青年団に参加して県の青年団体の代表をしていた関係で、今井書店の当時専務だった永井伸和さんと出会い、「本の学校」の活動の当初から、30年



再オープンした山形市内の郁文堂書店 写真提供＝追沼翼

くらい参画してきました。

「本の学校」とは、鳥取、島根両県にまたがる今井書店グループが創業120周年事業としてドイツの「書籍業学校」に学び、書店人の育成や、読書運動の推進をめざして1995年に設立したものです。全国から出版にかかわる人、読者や作家も参加する、2泊3日の本の学校・大山緑陰シンポジウムを5年間(延べ2千人)行うなど、今日まで「知の地域づくり」をめざして取り組んできました。ここから、朝の10分間読書など、新しい実践が全国に広がりました。書店人育成のための「本の学校」というモデル書店もあるのですが、私の興味は地域の図書館運動や、読書運動ですね。それから、0歳児・赤ちゃん家庭に絵本と読み聞かせ体験を届ける「ブックスタート」。鳥取は、この運動の先進県なんです。出版とは直接には関係ないですけど、鳥取県米子市・大山町に妻木晩田という弥生時代の遺跡がありまして、「むきばんだ応援団」という市民団体にもかかわっています。

西川直子……日吉津村というのは、人口はどれだけなんですか。

前田……3,600人くらいです。戦後間もなくからパルプ工場があって、財源が豊かな村といわれ、小学校区一つ分なんですけれど、米子市の中にすぽっと囲まれる形になっています。それから、米子市近郊でアクセスがいいということで、商業施設のイオンが立地しています。

実は、私は役場を退職後1年経って、日吉津村の村議会議員になりました。その立場から、議会では図書館の充実を求める質問をしたりしています。

■ 無書店地域という問題にどう向き合うか

鎌垣……全国の自治体の1/4に書店がないというのがニュースになったといえども、その中には、1万人以下の自治体も含まれるわけです。

1万人以下ではどんな小さい商いでも、成り立ちにくいですよね。江府町で一番栄えたのは、JR伯備線の江尾駅で、その前にかつて書店だった古民家が残されていて、町をあげてその復活を望んでいる。でも、そもそも町民がイメージする「まちの本屋」とは何なのか、まだまだ議論が必要です。

追沼……無書店地域というのにわれわれが衝撃を受けたのは、もともと1万人以下の自治体には書店はなかったのかもしれませんが、人口20万人以上の中核都市でも書店がなくなっていくということに危機感があったからではないかと思います。人口1万人以下と、20万人以上では、状況が違うと思うのですが、ある種、本屋という機能以上に、みなさんが本屋という言葉にいだいている希望のようなものがあるんだろうというのは、感じているところです。ただ、人口1万人以下のまちでは、書店が単一機能でやっていくのは難しい。複合化は避けられないと思いますが、図書館ではな

い、半公共的な部分をどうつくっていくのか、模索中です。

前田……イオン出店の時も日吉津村の担当課としてかかわったのですけれど、最初はイオン系列の書店が入っていましたが、撤退して現在は別のチェーン書店が入りました。書店経営は厳しい状況ですから、日吉津村もいつ無書店地域になるか、他人ごとではありません。また、ほかと同様、わが村も高齢化していて、一人暮らしのお年寄りは、イオンまで行くのも大変。歩いて行ける書店となにか、プラスアルファがあったらいいですね。

われわれ「本の学校」で、一昨年から『「本屋」を志す人のための書店開業講座』をオンラインでやってみたところ、大変な人気なんです。特に若い人に魅力があるようで、100人、200人の受講生が集まります。

たとえば、雑貨屋さんで、自分のお気に入りの本を置いたり、保育園に勤めている人が、園の許可を取って、週に一度、絵本の本屋さんをやったり。そんな動きが芽生えてきています。これからは、本のある空間が、まちなみやまちづくりとどうかかわっていくのか、期待したいです。

■若い人が「小さい本屋」をやりたい理由

鎌垣……その『「本屋」を志す人のための書店開業講座』は、私も講師をしているんですよ。実は神戸市が市民に向けて、2025年9月13日から全17回の「みんなの本屋講座」を始めています。受講料は17回で5,000円です。私も9月20日に第2回の講座の講師を担当しましたが、オンラインで150人くらい集まっていました。ただ、小さい商いとして本屋をやるに際して、どこまで持続可能なのか。実はそれにすべての生活をかけてという人は少なく、何かの兼業でちょっと本屋さんをやるには、門戸が開かれ、ハードルが下がってきているのは事実です。

今取り組んでいる江府町には、図書館があるのです。本に触れられる場所がないわけではない。その中で、本を買う喜びにはどんな意味があるのか、問い続けているところです。

追沼……そうですね。図書館と本屋の違いをどう考えるのかということですね。図書館では複本を持たず、新刊は本屋で買ってください、ということでしょうか。

鎌垣……今、公共でお金をかけて図書館を充実する方向にきています。そのことについて、誰もノーをいえないでしょう。そういう意味で、本って強いと思います。その一方で、本屋は民間だから、商売をしなくてはならない。本屋が苦しいのは、雑誌が売れなくなったからで、そもそも独立系書店といわれる小さくて個性を売りにしている書店は、雑誌を置かず、書籍だけで勝負しようとしている。でも、書籍は、利益率が良くないので、あまりよい商売じゃないんです。

日吉津村は、わりと最近、図書館をつくったんですよ。

■図書館と地域の書店との関係

前田……ええ、鳥取県の自治体で、最後にできた図書館です。10年前



かつて書店だった駅前の古民家をよみがえらせる試み
写真提供＝鎌垣英人



JR 伯備線江尾駅前風景 写真提供＝鎌垣英人

のことです。蔵書は5万4千冊です。

鎌垣……江府町は人口2,300人で図書館の蔵書は2万冊ほど。日吉津村の図書館は、江府町と比べて新しい分、複合施設で居心地のいい図書館を狙った感がありますね。日吉津村で、もし本屋をつくるのだったら、図書館の近くに、共存する形であつたらいいと思います。

前田……日吉津村の図書館は、村外からの利用も多いです。米子市民でも日吉津村図書館の方がアクセスしやすい人もいます。日吉津村の人口3,600人に対して図書館の登録者は5,000人。うち村内の登録者は1,500人。村外の利用者が多いのです。鳥取県の場合、リクエストした本が、県立図書館から各市町村の図書館へ翌日には届くというサービスが充実しています。それもあるんじゃないでしょうか。

追沼……図書館が公共空間であることは間違いないですが、本屋は私的空間であり、しかも公共性が内包されている、そのバランス感が魅力ではないかと思います。近年増えている、いわゆる

独立系書店、思いっきりキャラクターが出ている書店を、まちの本屋という文脈でどう評価するか、考えてしまいます。

私自身は、出身が宮城県で、大学時代から山形にいたので、いわゆるまちの本屋というものを経験してなくて、書店というと、大型書店か、地元の企業がやっているグループ書店しか知らないのですけれど。

■「独立系書店」と「まちの本屋」

鎌垣……そうなんです。50代、60代以上の人が思い描く「まちの書店」というものがあるんです。歩いて行けて、雑誌と漫画と文庫が半分を占めている。業界用語で買い回りというのですけれど、買い物に行くついでに必ず立ち寄る10坪くらいの本屋さんというイメージです。

個性的な独立系書店というと、雑誌は配置せず、趣味に沿った形の単行本中心で、65歳以上の人が書店に足を運んだ時に、雑誌がないのって言われるんじゃないかと、コロコロコミックがないと子どもたちは悲しまないかな、と、私はノスタルジーから脱却できないでいます。

追沼……本屋の中を歩き回って、ブラウジングして予期しない本と出合えるのが大事なのか、それとも本を注文でできればいいのか、悩みます。

鎌垣……毎週、毎月、本屋に新しい雑誌が並ぶというのは、わくわくしますよね。文藝春秋は毎月読んでいるから取っておいてね、というのとは別に、新しい雑誌を見てみたいというのはありますよね。

追沼……書店の空間が新しくなくても、本や雑誌が書店の空間を常に新しくしているという話を聞きました。そういう空気の入替わりは、図書館にはない部分だと思います。

個人が本屋の棚をシェアして運営するシェア型本屋が流行っていますが、棚の主人がよっぽど意識的に入れ替えをしないと、空気が流れが滞ってしまいます。

鎌垣……売れている本屋には、いつも新しい風が吹いていますね。棚

に風が吹いて、常に回転しているのが重要かと。そういう店には、1週間に1度は行きたくなります。

■書店と流通取次の役割

西川……話題を先に進めたいのですが、知の場を地域に届けるために、書店、流通、NPO、建築・まちづくり関係者、行政ができること、望みたいことは何ですか。

鎌垣……書店と流通取次については僕から話します。既存の書店は、何とか生き残りたい、持続可能でありたいと願っていますが、現実には、まさか、この書店までがとされる書店ですら、なくなっています。つまり、売り上げが、持続できる分水嶺を下回ってしまっているということなのです。これまでも本を置く場所を減らして、別なものを売るということは、やってきていたのですが、それも限界に来ていて、今は、中堅から大型書店まで、また貸し(サブリース)の場合も含め、スペースを賃貸に出しています。または、コワーキングスペースのように、有料で時間貸しにしています。

流通についていうと、小さい書店に手を差し伸べようという動きがあります。最初

に楽天ブックスネットワークが、もう9年ほど前から「ホワイエ」という仕組みをつくりました。1回の取引で50万円くらいだったら、掛け率8掛けくらいでおろしましょうというわけです。昨年、トーハンが『HONYAL』(ホンヤル)を始めました。保証金、保証人不要で月々100万円まで仕入れができますというものです。

そして、これは、絵本、児童書中心ですが、落合恵子さんのクレヨンハウスが母体となっている子どもの文化普及協会が、15年ほど前から保証金不要、買い切りで、小ロットでも可能な本の卸を行っています。掛け率は、買い切りということもあり通常の取次より低い7掛けくらいです。この、子どもの文化普及協会のおかげで、この10年、独立系書店がたくさんできるきっかけになったという成果があったと思います。それに「ホンヤル」が新しく参入して、子どもの文化よりは高いけれど返本もできる制度ができて、選択したり、兼ね合いで小さな本屋が運営できる条件ができました。

あと、本屋関連のNPOについては、われわれのブックストア・ソリューション・ジャパン[BSJ]と、本の学校のほかには聞きませんね。

■行政とNPO、建築・まちづくり関係者の役割

西川……行政の役割というと、どうでしょう。行政が書店をつくるという事例も出てきていますが。

前田……10年前に日吉津村図書館をつくる時、いい図書館をつくりましょうと個人的に村民に呼びかけたのですが、一部の方を除いてそれほど関心は高くなかったです。そもそのところ、本というものをどうとらえるか。私は、本は、人と人をつ



1995年に本の学校実習店舗として建築、現在は「本の学校今井ブックセンター」 写真提供=前田昇



今年1月、鳥取市にて開催の「本をめぐる旅」。左はNPO本の学校初代理事長・現顧問の永井伸和氏 写真提供=前田昇

なげるものという側面に注目したい。学校図書館をつくる時、教育委員会で担当をしていました。学校の規模のわりに広めにとったんです。そうやって、もう少し丁寧に、まちの中に本のあるスペースを充実させていくのも大切だと思っています。

鳥取知事だった片山善博さんの言葉ですが、「まちに診療所がなくなったら、行政は大問題にするけれど、書店がなくなることを放置していいのか」と。書店も病院(公立でなければ)も民間の施設だけれど、それを支えるまちづくりの点で行政との接点は大いにあるのではないかと。もう少し各自治体で議論していく必要はあると思います。

追沼……今回、書店を取材して、書店のほうも、形を変えながら、勉強スペースを設けたり、高校生を受け入れたりしている。若年層にとっては、そこで過ごした記憶が、年を重ねたのちにまたそこへ戻ってくる理由になるのでは。

鎌垣……7年前、八戸ブックセンターができたときは、まだ八戸には、本屋さんが何軒かあった。ですから、紀伊國屋や、丸善にしか置いていないような、少し専門性の高い

本もある書店をめざしたんですね。その点は明確でした。ところがこの7年の間に、近隣の書店が減ってしまったんです。

無書店地域に本屋をつくらうという場合、図書館との連携は欠かせないと考えています。たとえば、医療に関する本や、資格に関する本は図書館にあって、自分の趣味的な本は本屋さんで買うというような事例が生まれるのもいいなと思います。そして、そこに面白くて居心地のいい建築ができていけば、話題にもなるし、魅力的ですよ。

前田……われわれのNPO本の学校では「生涯読書をすすめる会」というグループをつくっています。胎児から高齢者までをタテに、図書館、書店、地域での本とつながる環境をヨコに読書が広がりを持っていけばと思います。

たとえば、山梨県立図書館では、2014年から「贈りたい本大賞」コンテストをしています。贈りたい本を1冊選んで、誰になぜ勧めたいのか、メッセージを書くというものです。そうやってみんなで選んだ本は、周辺の本屋さんと連携して、地域の書店で買いたいという運動をしています。図書館と書店がきっぱり役割分担をしてしまったら、無味乾燥になりますので、本との出会い、本を介した人と人の出会いが、つながりのある形で広がればと思います。

西川……今日は、全国で書店が次々に姿を消しているということをきっかけに、書店、流通取次、行政、NPO、建築・まちづくりの視点から、具体的な実態や展望など、有意義な話し合いができました。みなさんのこれからの成果に期待したいと思います。本日はありがとうございました。



おいぬま・つばさ

かまがき・ひとと

まえた・のぼる

1995年宮城県生まれ。2020年東北芸術工科大学大学院デザイン工学専攻地域デザイン領域修了。2016年にオブザボックスを設立。2019年に〈Day & Coffee〉を開業。山形市におけるエリアリノベーションや全国各地での公共空間活用・リノベーションに従事するかたわら、カフェ経営・シティブロモーションに取り組む

1961年生まれ。学生時代に古書業で働き、卒業後は本の取次の大阪屋・楽天ブックスネットワークにおいて、まちの本屋から大型書店、ネット書店担当に長く従事する。最近では出版団体版元ドットコムで書店在庫情報プロジェクトを担当し、また、まちに本屋をつくることを掲げたNPO法人ブックストア・ソリューション・ジャパンの副代表としても活動

1958年生まれ。大学卒業後、日吉津村役場入庁。定年退職後、村議会議員。NPO本の学校副理事長、NPOブックスタート理事、NPOむきばんだ応援団事務局長、一般社団法人日本青年館青年問題研究所研究員など務める